《臺大東亞文化研究》第六期　AUG 2024
DOI: 10.6579/NJEAC.202408_(6).0003

尊攘思想的傳承及其展開
—從吉田松陰經久坂玄瑞再至高杉晉作—

張惟綜*

幕末的黑船來航顯現出了將被以美國為首的西洋列強侵略的外患，以及懦弱的德川幕府無法與美國相抗衡的內憂。憂心此困境的志士吉田松陰提倡，作為志士當為之道應是將「尊王攘夷」付諸實行而不是僅沈溺於鑽研學問上。松陰在策劃一連串激進行動後雖亡於安政大獄，然而若展閱他在被處死之前所寫下的《留魂錄》，吾人便能看到松陰念茲在茲皆是在託付後人完成其未遂的「尊王攘夷」事業。實際上，在松陰死後，確實繼承其遺志奮而挺身實踐「尊王攘夷」的也是松下村塾的弟子。其中的佼佼者便是「松門雙璧」的久坂玄瑞和高杉晉作。這兩位當真是繼承師志，實踐「尊王攘夷」進而影響了幕末歷史的人物。

本稿將探究久坂玄瑞及高杉晉作的思想，特別是焦點將放在從松陰至玄瑞及晉作的思想傳承及其展開來進行論述。首先，吾人將研究玄瑞如何繼承松陰在最晚年時期所倡導的「草莽崛起」思想，其後再轉換成「草莽志士糾合義舉」論。接著再介紹松陰如何教化晉作。最後，高杉晉作繼承玄瑞遺志終而決起。在此吾人將闡明晉作是如何超越玄瑞的「草莽志士糾合義舉」論之極限進而組成奇兵隊並探討其思想背景。

關鍵詞：尊王攘夷、草莽崛起、吉田松陰、久坂玄瑞、高杉晉作

臺大學術期刊資料庫

* 嶺東科技大學應用外語系兼任助理教授

一、はじめに

幕末の黒船来航は、アメリカを筆頭とする西洋列強に侵略されるという外患と、徳川幕府がアメリカに拮抗できないという内憂を表している。こうした 難局を憂えた長州藩志士吉田松陰（1830-1859）は、単に学問の研鑽に没頭するより、むしろ「尊王攘夷」[1]を実践に移した方が、志士としての取るべき道だと唱えている。一連の過激な行動を画策した松陰は安政の大獄で刑場の露と消えたが、彼が処刑の前に書き綴った『留魂録』を紐解けば、自らの成し遂げえない「尊王攘夷」の回天事業を後生に託すという念願がうかがわれる。実際には、松陰の死後、確かに彼の志を継受し、「尊王攘夷」を実践しようと立ち上がったのは松下村塾の弟子たちであった。その中でも、とくに松門双璧と称される久坂玄瑞（1840-1864）と高杉晋作（1839-1867）はまさに師松陰の遺志を受け継ぎ、「尊王攘夷」を実行し幕末の風雲を一変させた人物である。

同じく松門双璧と言われるにもかかわらず、世によく知られているのは、禁門の変を指導しその戦いで命を犠牲にした久坂玄瑞より、むしろ奇兵隊を結成した高杉晋作の方である。祖父と父からの再三の注意によって家族に累を及ぼすことを配慮せねばならぬ晋作は、親孝行を全うするため、身が思うように行動できなかったのである。晋作が玄瑞に宛てた書簡から、その矛盾に満ちた心境がうかがえる。

> 僕、一つの愚父を持ちおり候故、日夜僕を呼びつけ俗論を申し聞かせ候。僕も俗論とは相考え候えども父の事故、如何んとも致し方ござなく候。恥じつ憂えつこれ迄諸君と御交り申し上げ候。なおまた先だって死候大父（引用者注：祖父）なども毎事僕を呼びよせ、何卒大なる事を致してくれ

[1] 通論によれば、水戸学は幕末の尊王攘夷論の思想的源流の一つとされる。たとえば、丸山真男氏の『日本政治思想史研究』（東京大学出版会、1952）、尾藤正英氏の「水戸学の特質」（『水戸学』所収、岩波書店、1976）、「尊王攘夷思想」（『岩波講座 日本歴史 13』所収、岩波書店、1980）、遠山茂樹氏の『明治維新』（岩波書店、1986）などが挙げられる。如上の著作の尊王攘夷に対する解釈は正鵠を射たものだと思われるが、とりわけ、尾藤氏が、丸山氏と遠山氏との論点を批判していることは注目を要するのである。確かに、水戸学はあくまでも尊王敬幕論にとどまっているが、水戸学を後の倒幕論乃至明治の絶対主義を醸成した道程と完全に切り離して考えることには疑問を抱かざるをえない。むしろ、尾藤氏が指摘するようにそれぞれの論理が連続的に関連し、進展したと考えた方が妥当であろう。

ぬな、父様の役にもかかわるからと申しつけ候故、松下塾へ参るさいもかくして居り候くらいの事にござ候。實に恥ずべきの至り、しかしながらこれにそむき候えば不孝となり候故そむく心にはなりかね申し候[2]。(『高杉』上巻、p.96)

したがって、晋作より玄瑞の方が自由に動きやすい身だと考えられる。松陰死後、直ぐさま松下村塾の有志者を指導し、率先して「尊王攘夷」を実行に移そうと奮起したのは玄瑞だと言っても過言ではなかろう。仮に、玄瑞が松陰刑死の五年後、すなわち元治元年（1864）禁門の変で命を落とさなかったら、おそらく彼は晋作と共に長州藩を倒幕勢力に形成させ、倒幕のためにさらに多くの戦功を残したであろう。しかし、蛤御門の変が起きたことによって倒幕の進展に拍車を掛けたのも事実である。つまり、松陰の志を継受し尊攘事業を敢行しようと崛起した玄瑞らの志士たちは戦によって命を犠牲にしたが、彼らの「死」はけっして無駄死にならず、むしろそれは次の志士の決起を引き起こしたのである。こうして、「尊王攘夷」のために志士たちは次から次へと身命を顧みずに奮闘した結果、幕府が転覆され明治維新が成就したように思われる。

本稿は久坂玄瑞と高杉晋作の思想を究明するにとどまらず、とくに松陰から玄瑞と晋作への思想伝承とその展開に焦点を絞って論究を進めてみたい。まずは、実践を何よりも重視する松陰が如何にして玄瑞と晋作を教化したかを論ずる。次に松陰が最晩年に唱える「草莽崛起」思想を玄瑞は如何にして継承し、さらに自らの「草莽志士糾合義挙」論に展開したかを討究する。最後に、玄瑞の遺志を受け継いで遂に決起した高杉晋作は如何に玄瑞の「草莽志士糾合義挙」論の限界を乗り越えて、奇兵隊を結成したかという思想背景を明らかにしようと試みる。

二、松陰の教化とその影響 その一―久坂玄瑞の場合―

久坂玄瑞が松下村塾に入門する前、「攘夷」について松陰と数回の文通による

[2] 高杉晋作の著述からの引用は、堀哲三郎編『高杉晋作全集』(新人物往来社、1992)に拠る。引用の際、(『高杉』、頁数)と略記する。

臺北藝術期刊資料庫

激越な議論を行っていた。その議論の内容が非常に長いため、ここでは重要なところを取り上げ松陰の教化とその影響を論述する。

安政三年（1856）五月に「義卿吉田君の案下に奉呈す」[3]（『久坂』、p.221）の書簡で、開港通商を強要する西洋夷狄を斬ることによって、人々に夷狄の襲来に備えさせ、自ずから享楽せず怠けて驕ることなく、政治が整い、武士の風紀が奮い立つのであると、玄瑞は松陰に所見を吐露している。

こうした客気に駆られる玄瑞が発した「即刻斬夷論」、すなわち日本の鎖国政策を無視し、開港通商を強要する西洋夷狄を即座に斬るべきだという主張を、「議論浮泛にして、思慮粗浅、至誠中よりするの言に非ず。世の慷慨を装ひ気節を扮ひて、以て名利を要むる者と、何ぞ異らん。僕深く此の種の文を悪み、最も此の種の人を悪む」[4]（『全集』第 2 巻、p.407）と松陰は厳しく論難している。さらに彼は玄瑞に躬行実践の重要性を力説している。

まず、注意すべきは、目下の情勢を議論しようとする場合、まず「当に己れの地、己れの身より見を起すべし、乃ち着実と為す」（『全集』第 2 巻、p.408、下線は引用者）という、松陰が強調する点である。つまり、松陰には、自ら聊かも医者という身分を弁えずに、徒に異国人を斬ろうと主張している玄瑞は、実行ができない、ただ高言を発した年少鋭気の若者にしか見えないのである。松陰が力説する「着実」とは、言行一致はもちろん、その前に最も重要なのは我が身を徹底的に弁えなければならないということである。したがって、実践が伴わない「即刻斬夷論」を豪語するのではなく、医者として為せることを考え、そして行動すべきである。さらにこうした「着実」は必ず利害打算の心を絶ち、死生の念を忘れるという自己犠牲の覚悟を内包しなければならない。「着実」によって言動することこそ、はじめて家族、友達、郷里、君主、民衆といった、いわゆる他者を感化することができるのである。

松陰の非難の返答を受け取った玄瑞は容易く兜を脱ぐわけではなく、逆に歴史、時機、道義という様々な角度から「即刻斬夷論」の正当性を論じており、堂々と松陰に論駁した。この師弟の議論の結果からみれば、松陰は「即刻斬夷論」を主張す

[3] 久坂玄瑞の著述からの引用は、福本義亮編『久坂玄瑞全集』（マツノ書店、1992、特装版）に拠る。引用の際、（『久坂』、頁数）と略記する。

[4] 吉田松陰の著述からの引用は、すべて大和書房版『吉田松陰全集』（初版）に拠る。引用の際、（『全集』、頁数）と略記する。

臺大學術期刊資料庫

る玄瑞の弁駁を認めた一方で、かつて夷狄を斬ろうと思い、結局それを実行に移せなかった経験[5]を玄瑞に披瀝しながら、その実践を玄瑞に求めのである。玄瑞はついには斬夷をすることができなかったが、松陰に対する感服は一層増して松下村塾に入門したのである。

実際、安政の大獄で松陰が刑死してから、玄瑞は松下村塾の弟子たちを引率指導してさらに長州藩の藩論を「尊王攘夷」の方に導いた。「尊王」によって、幕府に攘夷の実行を迫るだけでなく、また玄瑞が率いる志士達（光明寺党）も率先して将軍が誓った攘夷期限である文久三年（1863）五月十日に関門海峡に碇泊するアメリカ商船ペンブローグ号を砲撃した。したがって、彼が敢行した種々の行動から考えれば、ある意味では、それらは嘗て松陰に披瀝した「即刻斬夷論」から展開した「尊王攘夷」の実践であるように思われる。

安政五年（1858）大老井伊直弼が安政の大獄を断行し、反幕府の勢力を一掃しようとした。それによって松陰が罪人として死刑に処されたが、久坂玄瑞をリーダーとする松下村塾の弟子達は、松陰の無実を主張しその罪を晴らそうと企てていた。当時、長州藩論を主導しているのは、「公（朝廷）武（幕府）合体論」、すなわち天皇を尊崇し幕府を補佐するという見地を支持し「航海遠略策」を提言した永井雅楽であった。しかし、桜田門外の変で大老井伊直弼が暗殺されたことによって、幕府の威信が地に落ち、さらに坂下門外の変で老中安藤信正が襲撃を受け負傷したことによって、老中安藤が失脚しただけでなく、公武合体運動にも大きな打撃を与えたのである。その事件を機に倒幕を唱えている久坂玄瑞は長州藩論を主導するようになった。彼は先師松陰の遺骸を改葬しその忠義を顕彰すべきだと強く主張していたのである。「廻瀾條議」は玄瑞が長州藩主に提出した建白書であり、その建白書から玄瑞の尊王攘夷思想を理解することができる。その核心となる五か条を取り上げれば次のとおりである。

第一条　本藩正邪の弁を明かにし士風を興起し節義を鼓舞する事、天勅を貫き夷狄を制するの基本たるを論ず。

第二条　幕吏夷狄に怖嚇せられ重き、勅諚に背く事天地不可容逆無道に付断然明白に其の罪を糺すべきを論ず。

[5] 甲寅の年に及んで、僕宮部（宮部鼎蔵）と同じく東す。一日憤然として墨使を斬らんと欲す。已にして其の益なくして害あるを思ひ、遂に其の謀を止めたり。(『全集』第２巻、p.422）

臺大學術期刊資料庫

第三条　天皇夷狄の大患を御宸憂被為遊候大御心を体し午歳被仰出候、勅諚凛然相貫候様何處までも尽力すべきを論ず。

第四条　午歳の天勅を貫き幕府の奸吏を厳刑に処し下田条約に引戻すべきを以て越前市橋に其の実功を督責すべきを論ず。

第五条　戊午違勅之罪に相成候上は二百余年寅恭被為闕候事を相糺し、皇室尊崇君臣之分を正うするを論ず。(『久坂』、p.413-423)

以上を要約していえば、まず玄瑞の思想は尊王攘夷だといっても過言ではなかろう。しかし、詳らかに分析すれば、その尊王攘夷思想の背後に倒幕の思想が明らかに含まれていると考えられる。日米修好通商条約を結んだ幕府が、植民地にされる危機に日本を陥らせたから、厳罰に処されるべきである。また、安政五年以後の諸条約を下田条約にまで引き戻し、夷狄との交易を中止しなければならない。さらに、朝廷に「御親兵」を置き「御政事所」を設け、政治と軍事の実権を朝廷に帰すという王政復古の方針を掲げている。「廻瀾條議」にみられる倒幕の見地はまさに長井雅樂の考えと違うところである。

こうした倒幕の考えは後に玄瑞が書いた「解腕痴言」にもうかがわれる。その内容によれば、一旦毒蛇に腕を噛まれた人間は、命を保つためなら、その毒が全身に行き届いていないうちに、その場で即刻腕を切り捨てなければならないのである。したがって、現在の夷狄は蝮のような毒蛇なので、夷狄の毒害が未だ日本全土に行き渡っていないうちに、攘夷を即座に実行せねばならない、と指摘されている。玄瑞は攘夷の理由として六点を挙げて詳しく論じているが、その主旨は松陰に議論した「即刻攘夷」の内容とはほぼ一致しているように思われる。

三、松陰の教化とその影響 そのニ―高杉晋作の場合―

玄瑞と違って、高杉晋作は上級武士の出身で、安政四年（1857）松下村塾に入門する際に、人目を憚って夜密やかに塾に通っていた。なぜなら、世間の目からみれば、当時謹慎の身となった松陰が有罪者であり、父小忠太は晋作を松陰に接近させたくなかったからである。それにもかかわらず、依然として松下村塾へ松陰の指導を受けに行く晋作の行動自体は、松陰を師匠と崇めていることを意味すると考えられる。

入門してきた晋作を教育しようとする松陰は、つねに久坂玄瑞をライバルとし

臺大學術期刊資料庫

て晋作に意識させることによって負けず嫌いな晋作に勉学に励ませたのである。すると、晋作の学力も短期間で伸び、堂々と議論ができるようになった。ここから松陰の優れた教育力がうかがわれる。

実際、松陰が晋作に与えた影響は多大であった。そしてその影響は、たとえ松陰が死んだとしても、少しも変わっていない。

安政六年（1859）七月に晋作から丈夫の死すべき所について問われた松陰は次のように返答している。

> 僕去冬已来、死の一字大いに発明あり、李氏焚書の功多し。其の説甚だ永く候へども約して云はば、死は好むべきにも非ず、亦た悪むべきにも非ず、道尽き心安んずる、便ち是れ死所。世に身生きて心死する者あり、身亡びて魂存する者あり。心死すれば生くるも益なし、魂存すれば亡ぶるも損なきなり。又一種大才略ある人、辱を忍びて事をなす、妙。又一種私欲なく私心なきもの生を偸むも妨げず。死して不朽の見込あらばいつでも死ぬべし。生きて大業の見込あらばいつでも生くべし。(『高杉』上巻、p.135）

この時、松陰は李卓吾から影響を受けて「死」が好むものでもなく憎むものでもないという所見を披瀝している。松陰と李卓吾との関係を論究する著述としては、溝口雄三氏の『李卓吾』（集英社、1965）、河上徹太郎氏の『吉田松陰』（文芸春秋、1968）、劉岸偉氏の『明末の文人李卓吾』（中央公論社、1994）、広瀬豊氏の『続　吉田松陰の研究』（武蔵野書院、1932）などが挙げられる。その中では、松陰と李卓吾との関係を詳細に解き明かしたのは溝口雄三氏の『李卓吾』であると考えられる。松陰は李卓吾に自己の心情を仮託しており、『焚書』の「童心説」における「真」と「仮」とに共感をそそられている。「仮」とは悪か善かが分かっているのに実践に移せないことであり、善を善して悪を憎むことができる、先天の清純な正義心が「真」であり、さらにこうした「真」と「仮」とを敷衍すれば、現状の幕府における社会秩序、権威を「仮」とし、この「仮」を否定することによって、「真」とされる未来にあるべき様相を希求することにつながるのである。また、「知己」とは、己の志を理解できる、自分より勝っている「知己」を意味するのみにとどまらず、己の志を継ぐ者をも含意しているのである。最後に、李卓吾の「死の一字」から受けた影響は死の意味ではなく、むしろ死に裏打ちされた「生」の重さである。これは、道尽き心安んずる、それが死所ということと、身は亡ぶとも魂さえ存していれば、不足するところはないという、こ

臺大學術期刊資料庫

の二点に集約される。要するにこれは、一途に死を求めることなく、生死を自然に委ねるという一種の諦観だと考えられる。以上は溝口氏の解釈である。管見では、安政三年（1856）の「七生説」（『全集』第 2 巻、p.395-396）においては、松陰はすでに生死の問題にふれており、当時の彼が考えている死生観は後の生死自然観につながるものであった。ただし、李卓吾との出会いによって、これまでの、死だけに執着する思惟は、大業を成し遂げるという「生」に焦点が移ったのである。したがって、最も肝要なところは、道を尽くして心が安んずる、ということである。生きているとしても、もし心が死すれば、生きている利益がない、そして、魂が存すれば死んだとしても損害がない。その一方で、事業を成し遂げるために、侮辱を忍んで生き延びようとしてもかまわないし、また、命を落とすことによって永遠に参入することができるとすれば、死ぬべきであると松陰は考えている。安政六年（1859）の前半においては、ひたすら死だけに執着していた松陰に、「死」から「生」の意義を吟味し、体得した上に、生死に対する態度を反省し、あるべき様態を目指して進んでいく姿勢がみられるのである。

そして、松陰は引き続き晋作の「今後の進路はどうすればいいか」という悩みに次のように応答している。

> 先ず、遊学済ましなされ候わば、蓄妻就官等の事、ひたすら父母の御心に任せられ、もし君側にても御出でなれば、深く精忠を尽くし、君心を得るべし。しかる後、正論正義を主張すべし。この時、必ず禍敗を取るなり。禍敗の後、人を謝し、学を修め、一箇恬退の人となり玉わば、十年の後、必ず大忠を立つるの日あらん。（『晋作』上巻、p.135）

まずは遊学を済ませ、妻を娶って官に就き、ひたすら両親を安心させよという。そして藩主に仕えて忠義を尽くし信頼を得る。その後で正義正論を主張して失脚する。そして人に会わず、学問を修め、無私無欲の人になれば十年の後、必ず大忠を立てるという時機が訪れる。

上述した松陰の死への思いと進路の提言は確実に晋作の心に響いており、さらに彼の人生に大きな影響を及ぼしたのである。

実際、松陰死後、晋作は万延元年（1860）萩城一美人と言われるマサと結婚した。そして、翌年文久元年（1861）藩主世子の小姓役として初出仕し、とくに文久二年（1862）中国上海の遊歴によって開眼し、日本が外国列強に拮抗しようとするなら、無謀で勝算がない攘夷よりむしろ富国強兵の方が第一の要務だと彼は

臺大圖書館期刊資料庫

認識した。文久三年（1863）奇兵隊を結成し、初代の総監督を任命されたが、やがて奇兵隊と先鋒隊の衝突事件で責任を取り下野したのである。

元治元年（1864）、かつて松陰が幽囚された野山の獄に、島津久光暗殺未遂による逃走の罪で同じく投獄された晋作は、「幽室記」を認め、先師松陰のことを偲んでおり、自らが今まで実行してきた言動は正しく松陰に提言されたとおりであったと述懐している。原文の次のとおりである。

> 某少にして無頼、撃剣を好み、一箇の武人たらんことを期す。年甫て十九、先師二十一回猛士に謁し、始め読書して道を行なうの理を聞いて、先師に親炙す、わずかに一周星、去って東国に遊ぶ、時にわが藩俗論大いに行われ、ついに先師をして再び東国に囚えしむ、それがしまた江戸にありて、師のために獄中に往来す、師某に言いていわく、汝妻を蓄え吏となり、父母の心に任せて可なり、もし君側に就官し得れば、すなわち正論抗議し、惟れ道惟れ行なえ、しかればすなわち貶黜恬退必ずやの人たらん。しかる後読書して心を錬れ、十年後大いになすべきは、必ず可ならん、今にしてこれを思えば、言なおあるがごとし 師すでに遠く去る 今を隔つるまさに十歳ならんとす。しかして余の今の所行、先師の言と真に符節を合するがごとし。（『晋作』下巻、p.349、下線は引用者）

したがって、幽囚された晋作が牢獄で吐露している上述の心境をみれば、彼は、単に松陰の志を受け継いだだけでなく、最も松陰の指導を遵奉し行動した弟子だといえよう。

四、草莽崛起思想の継受とその展開

安政五年（1858）に大老の井伊直弼が詔勅を待たずにアメリカのハリスと日米修好通商条約を締結したことを知った松陰は、これまでの温和な諫争路線を一変し、激憤のあまり七月に「大義を議す」を書いて違勅の幕府を討伐すべきだと主張するようになったばかりでなく、さらに九月の水野土佐守の暗殺策、大原三位西下策、十月の梅田雲浜を救うための伏見獄の破壊策、十月下旬から十一月にかけての老中間部詮勝の要撃策、翌安政六年（1859）二月の大原重徳による長州藩主毛利敬親要駕の斡旋という伏見要駕策など、種々の過激な行動を策謀したのである。結局、これらの策略はすべて蹉跌に終わったにもかかわらず、挫折に

臺大學術期刊資料庫

屈せぬ松陰は最後に草莽崛起を提言した。

草莽崛起は松陰が晩年に唱える思想でもあり、尊王攘夷を実践する最終の手段でもある。松陰の草莽崛起論におけるその代表的なところを取り上げれば、次のとおりである。

> 義卿、義を知る、時を待つの人に非ず。草莽崛起、豈に他人の力を仮らんや。恐れながら天朝も幕府・吾が藩も入らぬ、只だ六尺の微躯が入用。されど義卿豈に義に負くの人ならんや。(『全集』第 8 巻、p.321)

真の忠義を知悉するからこそ、尊王攘夷を実践する時機を待たない人間であると松陰は自らのことを言っている。彼の考えによれば、もし尊攘事業の実践は事の成否を計って行うかどうかを決定するならば、それはまさに功業を希求する人間の行動にほかならない。真の忠義とは事の成否を顧みず断然として実行すべきだということである。しかし、前述したように、松陰は安政五年（1858）の後半から尊王攘夷のために主として五つの行動を企てたが、挙げ句の果てにいずれも失敗してしまったのである。彼はこれまでの失敗の原因を反省し、ついに今までの他者に期待して尊王攘夷を成し遂げようとする思惟を止め、あくまでも自分自身を頼りにすべきだという結論に辿り着いたのである。したがって、松陰が述べた「天朝も幕府・吾が藩も入らぬ、只だ六尺の微躯が入用」の意味は決して天皇、幕府、長州藩のそれぞれの存在を否定するというわけではなく、焦点は「只だ六尺の微躯が入用」にあり、すなわち己の力を頼りにして尊王攘夷を実践するために立ち上がるべきだという再度の確認にほかならない。

こうした解釈に立脚すれば、次の一文における松陰の草莽崛起論の意味が明らかになる。

> 独立不羈三千年来の大日本、一朝人の羈縛を受くること、血性ある者視るに忍ぶべけんや。那波列翁を起こしてフレーヘードを唱へねば腹悶医し難し。僕固より其の成すべからざるは知れども、昨年以来微力相応に粉骨砕身すれども一も裨益なし。徒に岸獄に坐するを得るのみ。此の余の処置妄言すれば則ち族せられんなれども、<u>今の幕府も諸侯も最早酔人なれば扶持の術なし。草莽崛起の人を望む外頼みなし。されど本藩の恩と　天朝の徳とは如何にしても忘るるに方なし。草莽崛起の力を以て近くは本藩を維持し、遠くは天朝の中興を輔佐し奉れば、匹夫の諒に負くが如くなれど、神州に大功ある人と云ふべし</u>。(『全集』第 8 巻、p.292-293、下線は引用者)

臺大藝術期刊資料庫

松陰は世界を視野に入れて日本を世界における日本ととらえるので、夷狄による植民地化という危機を警戒し、フランスのナポレオンが唱えた自由をも意識している。この一文だけでは、松陰は果たしてナポレオンが唱えた自由を理解するかどうかは判断しにくいし、この文以外の自由に関する松陰の論及もないため、これ以上自由に関する松陰の理解の論究は立ち入らないことにする。松陰は安政五年（1858）から尊王攘夷のために画策した様々な計画は尽く失敗し、ついには投獄されたという境地を嘆いたが、最終の手段として「今の幕府も諸侯も最早酔人なれば扶持の術なし。草莽崛起の人を望む外頼みなし」と述べており、彼は幕府や諸侯に期待せず、そして草莽崛起を提言した。彼は藩の恩と天皇の徳に報いるため、自らの力を頼りにして、藩、天皇を護持しようと立ち上がろうと宣言したのである。草莽―藩―天皇という階層的構図では、幕府が除外されていることに留意しなければならない。したがって、たとえ松陰は刑死まで倒幕の行動には踏み切らなかったとしても、その草莽崛起の論説は幕府を転覆することを暗々裏に内包している、ということがうかがわれる。

こうした松陰の草莽崛起論を受け継いで一層の展開を遂げたのは久坂玄瑞である。次の一文を取り上げ、玄瑞が述べた「草莽志士糾合義挙」論をみよう。

> 諸侯恃むに足らず、公卿恃むに足らず、草莽志士糾合義挙の外には迚も策之れ無き事と私共同志中申し合わせ居り候事に御座候。失敬乍ら、尊藩（引用者注：土佐藩）も弊藩も滅亡して大義なれば苦しからず、両藩共存し候とも、恐多くも皇統綿々万乗の君の御叡慮相貫不申而は、神州に衣食する甲斐は無之歟と友人共申居候事に御座候。(『坂本竜馬関係文書』第 1 巻、p.58。『久坂』、p.502。但し、『久坂』では「弊藩も」の三字が欠如している。下線は引用者）

これは文久二年（1862）正月二十一日に玄瑞から土佐藩勤皇志士の武市瑞山へ宛てた書簡の一部である。諸侯、公卿には期待ができない。今、天皇の考えを遵奉し、実行しようとするなら、藩の隔たりを突破して志士を呼び集めてから共に行動するしかない。そのためなら、土佐藩と吾が長州藩は滅んでも少しも苦しくないと玄瑞は披瀝している。つまり、尊王攘夷を実行に移すために、彼は従来の藩という根強い枠を乗り越えたのである。しかし、注意すべきは、玄瑞の「草莽志士糾合義挙」論は藩の存在を否定する言説ではないことである。

> 偖者、私同社中共所存には、此節の形勢中々藩与藩合体するなど申儀は万々

臺大學術期刊資料庫

行はざれる事にて可有之候得ば、政府は先度外に打置、各国有志之士相互に連結して尊攘の大挙有之度事と思詰申候。元来、大名の存亡にのみ懸念仕候而は不相済、大名の家幾百万年相続候とも、天朝の御叡慮相貫不申而者、何の益にも相立不申候。先御叡慮一日も早く相貫候様にこそ仕候得は、自然藩君の名を顕はし、藩祖の霊に愧ぬ事に相成可申歟と同社中申談候事に御座候。（『久坂』、p.464、下線は引用者）

もし、どうしても藩と藩の連携態勢が整わなければ、藩という従来の枠組みを飛び越えて各藩の志士の横断的な集結を行うことによって尊王攘夷を実践しようと玄瑞は考えている。さらに彼は「大名の存亡」より「天朝の御叡慮」の方が重要であり、天皇の御叡慮が徹底されるならば、藩主の名声は自ずから顕れ、藩の祖先に恥じないと論じている。一方では、明らかに玄瑞の「草莽志士糾合義挙」論は行動理念としては藩という隔たりをすでに超越し、志士の横断的、超藩的な結集、行動を意味するが、他方では、こうした「草莽志士糾合義挙」論は、藩という組織を破壊して新体制を構築するには至ってはいない、という点に留意すべきである。

以上を検討してきたように、松陰の草莽崛起の思想を継受した玄瑞は、松陰と同様に在野志士の力を最も頼りにしているが、草莽—藩—天朝という階層的枠組みで尊王攘夷を実行しようとする松陰に比すれば、玄瑞の「草莽志士糾合義挙」論は超藩的、横断的な志士の連合を目指すため、藩を飛び越えて草莽-（藩）-天朝という構図に変わったのである。玄瑞の見地からすれば、藩は完全に除外されるわけではないが、「草莽志士糾合義挙」論に従って尊王攘夷を推進すればするほど、天朝への求心力が増大すると同時に藩への求心力は減少することになる。

五、高杉晋作の決起—奇兵隊の結成—

文久三年（1863）久坂玄瑞が率いる光明寺党は、馬関で外国の商船を砲撃し攘夷を決行したが、当初襲撃を受けた外国船は応戦できずに逃げ去った。しかし、すぐ外国の軍艦が報復のため下関に来襲したことによって長州は敗北を喫したのである。

このように攘夷を断行した長州が戦敗を受けたということを背景に、晋作は急遽藩主に呼び出され、軍備の再整備について良策はないかと聞かれ、「願わくば

臺大學術期刊資料庫

馬関のことは臣に任ぜよ。臣に一策あり、請う、有志の士を募り一隊を創立し、名付けて奇兵隊といわん」（『奇兵隊日記』）と奇兵隊の結成を申し入れたのである。「奇兵」というのは、正規軍としての武士に対する「異端」的な存在だと言わなければならない。しかも戦力の視点から考えれば、奇兵隊は「神出鬼没」して敵を奇襲するようなゲリラ軍事力である。

さらに晋作は奇兵隊の結成綱領の五か条を次のように藩政府に提出した。

一、奇兵隊の義は有志の者相集まり候につき、陪臣・雑卒・藩士を撰ばず、同様に相交じり、もっぱら力量をば貴び、堅固の隊相調え申すべしと存じ奉り候。

一、この後御伺い申し上ぐべきかどは、書面をば、前田孫右衛門まで差し出し申すべく候間、直々　御前へ差し出され候よう願い奉り候。

一、奇兵隊人数、日々相加り候については、これまで小銃隊の内おこれあり、又は小吏相勤め候者もこれあり候えども、畢竟匹夫も志奪うべからず候えども、これらも拒ぎ難き趣にござ候。もとより御組立の人数内をこれより相招きは仕らず候えども、自然奇兵隊望み参り候わば、隊中へ相加え申すべしと存じ奉り候。

一、この往き毎合戦銘々勇怯も相顕れ申すべきにつき、日記つぶさに相調えおき差し出すべく候間、賞罰の御沙汰陪臣・軽率・藩士に拘らず、速やかに相行なわれ候よう仕りたく存じ奉り候。

一、隊法の儀は和流西洋流に拘らず、おのおの得物を以って接戦仕り候事。

（『晋作』上巻、p.260、下線は引用者）

注意すべきは第一条である。現代語に訳すれば、「奇兵隊は有志の者の集まりで、陪臣・軽卒・藩士を撰ばず、同様に交わり、もっぱら力量を重視し、堅固な隊をつくる」ということである。奇兵隊の入隊条件は極めて簡単で、「尊王攘夷」という志を持っていれば、身分を問わずだれでも入隊できるのである。こうした発想は、家格・身分を基準にした幕藩体制の兵力編制の原理とは完全に異なっているものである。何ゆえに晋作は従来の兵力編制の基準という壁を突破できるかといえば、恐らく、既存の武士の戦力で戦うことには限界を感じたからであろう。

また、幕末の舞台に登場した奇兵隊が象徴する意味について、田中彰氏は次のように分析している。

この「異端」としての兵力、ないしはゲリラ軍事力の創出は、およそ伝統を

臺大學術期刊資料庫

> そのまま踏襲する停滞的な社会から生まれない。いや、そうした伝統的、停滞的社会を桎梏と感じ、新たなる社会と来るべき世界へのめざしているときにのみ、その旧体制突破口の先兵としてこうした軍事力が登場する。それが奇兵隊なのである。その意味で奇兵隊の誕生は維新変革の暁鐘を意味している。〔中略〕その奇兵隊は、外圧からみずからの土地を守る軍事力として結成されたのである。したがって、そこには郷土防衛ひいてはナショナルな要素が孕まれたし、身分をこえた「有志の者」の自主的な参加が生まれたのである[6]。

田中氏の指摘は的確だといえよう。すなわち、黒船の衝撃によって外国列強の圧倒的な軍事力を前に、国を守り外敵を追い払おうとする「攘夷」の気運が高揚するとき、実際に先駆けとして「攘夷」を実行に移し外国に戦いを挑んだのは長州であった。長州は戦ってそして敗戦した。それによって従来の伝統的戦力に疑問符が投じられ、変革が求められるようになった。これはまさに奇兵隊が創出された原因である。ただ、奇兵隊結成の背景にもう一つ補足できるのは、天保の大一揆の影響によって、農民のエネルギーを転向させようと藩政府は農民を兵士とすることを内的な要素をすでに考えるようになったという内的な要素をも無視できない、ということである。

六、おわりに

松陰と同じく尊王攘夷を唱道している玄瑞は、先師松陰の思想を継受しただけでなく、さらに尊王から展開した攘夷を巧みに唱えながら、幕府を転覆しようと画策していると考えられる。市井三郎氏は『思想からみた明治維新』において、玄瑞の攘夷論をナショナルな戦略を明確に意識して行動するという自覚的攘夷論と位置づけている。それはむやみやたらにが外国人を切るという信仰的攘夷論とは完全に違う思想であると彼は指摘している[7]。もちろん、年少の時期に玄瑞が吐露した「即刻斬夷」論は信仰的な攘夷論に似ているが、松陰に師事してからその影響を受け、その攘夷論が信仰的な立場から自覚的な立場へと変わったと考えられる。そして、松陰の草莽崛起思想を受け継いだ玄瑞は、藩と藩の障壁を突破し 、志士の横断的、超藩的な結集、行動を主張するようになった。玄瑞の「草

[6] 田中彰『高杉晋作と奇兵隊』(岩波書店、2006)、p.22、参照。
[7] 市井三郎『思想からみた明治維新』(講談社、2004)、p.171、参照。

臺北藝術期刊資料庫

莽志士糾合義挙」論は藩の隔たりを乗り越え、文久年間で一つの頂点に達したといえるが、元治元年（1864）七月に、彼が京都で挙兵し、そして戦敗したこと、すなわち禁門の変の敗北は、玄瑞の「草莽志士糾合義挙」論がすでに限界に達した、ということを物語っているであろう。しかし、玄瑞の遺志を受け継いで次に決起した高杉晋作は、玄瑞の「草莽志士糾合義挙」論の限界、すなわち戦争するにはやはり藩による武器の補充､経済面の支援などが不可欠であることを理解したのである。文久三年（1863）に奇兵隊を結成し､初代の総監督を担当した彼は、二年後の元治二年（1865）に藩の主導権を握って藩論を倒幕に転換させ、挙藩の力で尊王攘夷を推し進めたが、慶応三年（1867）に病没したため、ついに倒幕の成功を見届けることができなかったのである。

拙稿は 2021 年の 10 月 16 日に台湾大学日本語文学学科が主催した「2021 年台大日本語文創新」国際シンポジウムで発表した内容を修正・加筆を施したものである。ご意見・ご指導を下さった方々に深謝の意を表す。

臺大學術期刊資料庫

The Transmission of Ideas and Their Development -From Shouin Yoshida through Genzui Kusaka to Shinsaku Takasugi

Chang, Wei-tsung*

The arrival of the black ships at the end of the Bakufu period caused the external problems of being invaded by the Western powers, led by the United States, and the internal worries of the weak Tokugawa Bakufu, which could not compete with the United States. Shouin Yoshida, who was concerned about this plight, advocated that the way to be a scholar should be to put into practice "honour the Emperor and drive off the barbarians" rather than just to indulge in academic studies. Although Shouin died ins Ansei Prison after planning a series of radical actions, in "Soulful Minute" he wrote before his execution, it shows that Shouin entrusted his descendants with completing his unsuccessful attempt to "honour the Emperor and drive off the barbarians". In fact, after his death, it was Shouka Sonjyuku who succeeded his legacy and stood up for the practice of "honour the Emperor and drive off the barbarians". The best of them were Genzui Kusaka and Shinsaku Takasugi of the "Matsumon Twins". These two men really followed in the footsteps of their teachers and put into practice the "honour the Emperor and drive off the barbarians" and thus influenced the history of the Bakufu.

This paper explores the thought of Genzui Kusaka and Shinsaku Takasugi, with a particular focus on the succession of their thought and its development from Shouin to Genzui and Shinsaku. First, we examined how Genzui inherited the idea of "rise with determination from the grass roots" advocated by Shouin in his last years, which was later transformed into the theory of "rise from the grass roots steps up against injustice". This was followed by an introduction to how Shouin taught Shinsaku. Finally, Shinsaku Takasugi inherits Genzui Kusaka's will and finally rises. Here we will explain how Shinsaku transcends the limits of Genzui's theory of "rise from the grass roots steps up against injustice" to form the kihei-tai troop and explore the background of his ideology.

Keywords: Honour the Emperor and drive off the barbarians, Rise with determination from the grass roots, Shouin Yoshida, Genzui Kusaka, Shinsaku Takasugi

臺大學術期刊資料庫

* Adjunct Assistant Professor, Department of Applied Foreign Languages, Ling Tung University

尊攘思想の伝承とその展開
－吉田松陰から久坂玄瑞を経てそして高杉晋作へ－

張惟綜*

幕末の黒船来航は、アメリカを筆頭とする西洋列強に侵略されるという外患と、徳川幕府がアメリカに拮抗できないという内憂を表している。こうした難局を憂えた長州藩志士吉田松陰は、単に学問の研鑽に没頭するより、むしろ「尊王攘夷」を実践に移した方が、+志士としての取るべき道だと唱えている。一連の過激な行動を画策した松陰は安政の大獄で刑死したが、彼が処刑の前に書き綴った『留魂録』を紐解けば、自らの成し遂げえない「尊王攘夷」の回天事業を後生に託すという念願がうかがわれる。実際には、松陰の死後、確かに彼の志を継受し、「尊王攘夷」を実践しようと立ち上がったのは松下村塾の弟子たちであった。その中でも、とくに松門双璧と称される久坂玄瑞と高杉晋作はまさに師松陰の遺志を受け継ぎ、「尊王攘夷」を実行し幕末の風雲を一変させた人物である。

本稿は久坂玄瑞と高杉晋作の思想を究明するにとどまらず、とくに松陰から玄瑞と晋作への思想伝承とその展開に焦点を絞って論究を進めてみたい。まずは、松陰が最晩年に唱える「草莽崛起」思想を玄瑞は如何にして継承し、さらに自らの「草莽志士糾合義挙」論に展開したかを討究する。次に、晋作が如何にして松陰に教化されたかを紹介し、最後には、玄瑞の遺志を受け継いで遂に決起した高杉晋作が、如何に玄瑞の「草莽志士糾合義挙」論の限界を乗り越えて、奇兵隊を結成したかという思想背景を明らかにしようと試みる。

キーワード：尊王攘夷、草莽崛起、吉田松陰、久坂玄瑞、高杉晋作

臺大學術期刊資料庫

* 嶺東科技大学応用外国語学科兼任助理教授